

## 呉越国史跡調査記

劉 海 宇<sup>※</sup>

実施日 2014年3月30日～31日

参加者 藪 敏裕（岩手大学平泉文化研究センター）

伊藤博幸（岩手大学平泉文化研究センター）

劉 海宇（岩手大学平泉文化研究センター）

田村大輔（岩手大学教育学部学生）

呉越国は晩唐期の鎮海・鎮東両軍節度使錢鏐を開祖として、両浙地方（現在の浙江省）を支配した五代十国期の国のひとつである。978年に呉越国王錢弘俶が北宋王朝に国土と人民を献上して自ら終わりを告げるまで、実質上「三代五王」をへて80年余り存続した。唐末五代の戦乱期にあたって、歴代の呉越王は仏教の篤信者として中原王朝への朝貢を絶えることなく行い、内政面では農業と手工業を発展させて海外貿易を積極的に推進する政策を取ることで、まれに浙江地方の安定と繁栄を保っていた。五代十国期に、呉越国が日本との交流をほぼ完全に独占したことは既知の事実だが（木宮泰彦『日華交流史』第十章）、最近の雷峰塔の発掘などでは、その地宮遺跡から日本の「皇朝十二銭」のひとつである「饒益神宝」銭のほかに、阿育王塔・金銅仏・金字經典なども検出されたことは呉越国と日本との文化交流について我々に新たな知見をもたらしている。呉越国の遺跡における最新の発掘および研究状況を把握するため、浙江省文物考古研究所の協力を得て、現地調査を行なった。

3月30日（日）

8時30分にホテルのロビーに集合し、ワゴン車で西湖文化広場に位置する浙江省博物館武林館区に向かった。今日は快晴で、暖かい。浙江省文物考古研究所の鄭建明氏と西湖文化広場の駐車場で合流し、博物館の開館時刻9時まで少し時間があつたため、そのすぐ横に流れる大運河の河岸を散歩しながら景色をじっくりと眺めた（写真1）。武林館区は2009年に開館された浙江省博物館の分館であり、その1階には「越地長歌—浙江歴史文化陳列」という通史をテーマにした常設展がもうけられている（写真2）。旧石器時代の遺物から始まるが、やはり思わず目をとめるのは青銅器・陶磁器および呉越国の遺物等である。ほかに瑞安慧光塔から出土した北宋期の写経『妙法蓮華経』・『大方広佛華嚴経普賢行願品』等、温州白象塔から出土した北宋期の塑像、金華万佛塔から出た北宋期の金銅仏などが展示されている。日本の経塚に埋葬される宝物と比較できるのではないかな。見学したあとに、1階のミュージアムショップで図録『呉越勝覧—唐宋之間的東南楽国』・『浙江省博物館』・『瓷源摭粹』

※ 岩手大学平泉文化研究センター

・『越地範金』・『窯火遺韻』・『東土佛光』等を購入した。

つぎに向かったのは杭州市博物館である（写真3・4）。杭州市博物館は繁華街呉山広場に位置し、2001年まで杭州歴史博物館と称された。ここでは杭州市管轄範囲内に発掘された近年の考古新発見の成果を、陶磁器を中心に展示している。その中に、臨安市唐代晩期の水丘氏墓から出土した定窯磁器や、呉越国期の康陵から出土した秘色磁、あるいは南宋臨安城（現在杭州市）遺跡の新発見文物、さらには朝暉路元代磁器の穴蔵とかが特に人の目を引く。その後、近くの河坊街美食街にある杭州料理屋天興楼で遅めの昼食をとった。定番メニューの「油炸臭豆腐」はおいしかった。

昼食後、車で移動すること1時間15分、14時30分臨安市文物館に到着。館長の朱曉東氏が迎えてくださった。簡単な挨拶をしたあとに、さっそく3階に上がって同館の所蔵している呉越国期の陶磁器を視察した（写真5）。同館の新館は建築中で、旧館にあたる現在のところでは展示室はない。そのため、陶磁器を保管庫から事務室のテーブルに出していただいて、見学した。水丘氏墓や康陵から出土した「国家一級文物」の秘色磁等を目の前でじっと見つけることができとても感激した。見学後、朱曉東館長から図録『物華天宝』をいただいた。朱館長の紹介の中で、2003年に功臣山のふもとで呉越国期の大型寺院遺跡を発掘調査するに際し、仏殿・ヘイ・排水施設・道路などの遺構を検出し、また建築材料などが数多く出土し、同館に保管されているという。全国から見ても発掘された五代十国期の寺院遺跡としては唯一の例であるとされている。

朱館長と分かれて杭州へ戻る途中に、功臣寺遺跡に立ち寄ることにした。功臣山は海拔157メートルの低い山である。その山頂に呉越国初代の王―錢鏐が後梁貞明元（915）年に建立したとされる功臣塔は現在に至っても聳え立っている。功臣山のふもとに「全国重点文物保護単位」と指定された「功臣寺遺跡（含婆留井）」が位置している（写真7・8）。境内に婆留井という井戸がある。錢鏐が生まれつきの異相をもつため、お父さんがこれを井戸に遺棄しようとする際、おばあさんに留められたと伝わっている。ゆえに、錢鏐の字の一つは婆留、井戸の名前は婆留井と名づけられたという。功臣寺は、錢鏐が「宅を<sup>す</sup>捨て寺と為す」ために、建立された寺院で、普光大師と称されたその19子錢元玩が出家した寺院でもあるとされている（『呉越勝覧―唐宋之間的東南楽国』、中国書店2011年、17頁）。

日はしだいに地平線に近づくため、山頂へ登って功臣塔を視察するのをやめて杭州市内にもどった。18:30ホテル到着。

3月31日（月）

8時30分にホテルのロビーに集合し、龍泉窯磁器の元素分析を行なう平原英俊先生グループ3名を浙江省文物考古研究所へ見送ったあと、保俶塔のある宝石山に向かった（写真9）。鄭建明氏と保俶路の登山口で合流し、風情のある巷陌「宝石山一弄」にそって登山を始めた。まず、呉越国期に建立された大仏寺遺跡を見学した。その後、民国時代の「関岳廟昭忠祠」牌坊（写真10）をくぐって保俶塔にめざす。途中、「純真年代」というお茶屋さんですすめられた龍井の「明前茶」（清明節前の新茶）を注文し、露天の茶席で一服した。今日は、風景をばかす霧が立っているため、西湖に神秘性を漂わせ、対岸の雷峰塔を五里霧中に隠している。西湖は平泉と同時に2011年6月に、「杭州西湖文化景観」として世界遺産登録を果たした。現存する保俶塔は民国二十二年（1933）年に修復したもので、細身で優美な姿を見せている。下山後、車で西湖をまわって南岸にある雷峰塔に向かった。

11時20分雷峰塔に着いた（写真11）。この塔は民国十三年（1924）年に倒壊してしまい、2000年2月から2002年8月まで三段階に分けて浙江省文物考古研究所が主催する発掘を経て、再建されて

現在に至っている。さっそく入場料を購入し、中に入った。基壇の部分をそのままの状態で遺跡として保存し（写真13）、古い写真等の史料によってその真上に新しい塔を再建した。現在の塔は高さ約45メートル、八角形の五階建てである。まずエスカレーターに乗って入口に入る。基壇の遺構および周りの壁に貼った説明などを見学してから、エレベーターで4階まで上がる。ここで一周しながら、360度の大パノラマで西湖の美景を鑑賞する（写真14）。昼になっても、霧が明るくなる見通しはなく、西湖の三島まで見えるが、より遠くの景色は霧に覆われている。

12時に塔をおりて庭にある放生池を見た後に、車に乗って浙江省文物考古研究所へ向かった。午後、平原先生グループと合流して上海に行く予定である。そのため、同研究所の沈岳明氏は勝利河美食街のレストランで送別会を開いてくださった。



写真1 大運河（浙江省博物館武林館付近）



写真2 銀鈿（浙江省博物館武林館）



写真3 杭州市博物館外観



写真4 修内司官窯磁器（杭州市博物館）



写真5 臨安市博物館吳越国遺物見学会



写真6 臨安市錢王陵園



写真7 吳越国功臣寺と功臣山（山頂に功臣塔）



写真8 臨安市功臣寺婆留井



写真9 吳越国期の保俶塔



写真10 「関岳廟昭忠祠」牌坊

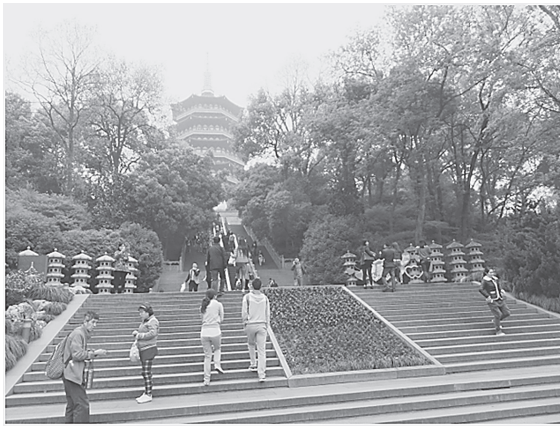


写真11 再建された雷峰塔



写真12 雷峰塔入口付近



写真13 保存された雷峰塔基壇



写真14 雷峰塔から西湖を眺望